

学認を発展させていくための 学認SPの開拓・開発

2024.6.12
鈴木 彦文

学認への参加を促すための基本的な事柄

1. 学認への参加対象となる機関が学認に参加する必要がある出てくる事象の発生(例えば RDM や OA など学認SPの利用が必須になるなど)
2. 機関が学認に参加する意味を見出せる学認 SP(Service Provider)の拡充
3. 機関が学認に参加することでコスト削減が実現
4. なんらかの形で学認に関わろうとする・参加しようと希望する機関・プロジェクトへの対応・支援



**2. を達成するため、学認 SP 改良・開発・開拓・発掘
(連動して、3. も実現できるとなお強い)**

学認SP開拓とコミュニティ拡大の重要性

IdP側(機関側)の意見採用

- **多様な視点の反映:** IdP (Identity Provider) 側の多様な意見を取り入れることで、学認SPのサービス品質向上を図る。
- **ユーザーのニーズに対応:** IdP側のフィードバックを元に、ユーザーの具体的なニーズに対応したサービスを提供。

学認未参加大学の開拓

- **未参加大学のニーズ把握:** 学認未参加大学のニーズを拾い上げ、参加を促進。
- **障壁の除去:** 参加を妨げる障壁を特定し、解決策を提供。

コミュニティの拡大

- **多様性の確保:** さまざまな大学や組織をコミュニティに迎え入れることで、多様な視点とニーズに対応。
- **協力と共有:** コミュニティ内での情報共有と協力を促進し、学認SPの価値を最大化。

学認 SP に対する機関の期待

サービスが向上する・新たなサービスが生まれることによって

- 受験生が増える・優秀な学生が増える
- 教育の質が向上する・研究が促進される
- 関係しそうな事柄のコストが下がる・同等のコストでより高機能・高性能になる
- その他なんでも良いので大学に貢献できる

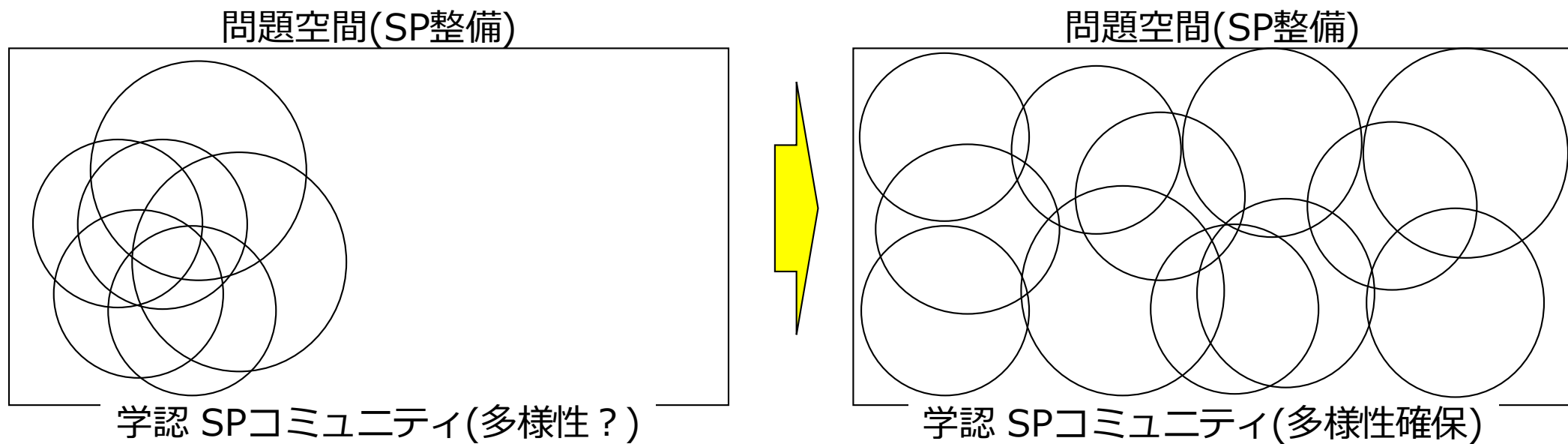


**学認 SP だけでなく大学のような機関へ売り込む基本
（「先端的な取り組み」では響かない）**

学認 SP の整備(改良・開発・開拓・発掘)

魅力的で十分活用可能な学認SPの充実が必要

(自戒)技術的な側面だけでなく
「サービス」としての本質を考えていく必要
学認 SP コミュニティが重要(多様性を確保)



学認 SP コミュニティ

学認 SP コミュニティには多様性(集合知)が必要

1. 創造性と革新の促進

- 多様な視点: 異なる文化、経験、知識を持つ人々が集まることで、ユニークなアイデアや新しい解決策が生まれやすくなる。
- 新しいアプローチ: 多様なバックグラウンドを持つメンバーが異なる方法論やアプローチを持ち込み、革新が促進される。

2. 問題解決能力の向上

- 包括的な視野: 多様な意見や視点が集まることで、問題に対してより包括的な理解が得られ、効果的な解決策が見つかりやすくなる。
- バイアスの排除: 多様なメンバーがいることで、特定のバイアスや偏見に陥りにくくなり、公正でバランスの取れた意思決定が可能になる。

**学認 SP をより発展させるために、
幅広い方々の学認 SP コミュニティへの協力をお願いします**